

高齢者の衣服の色の嗜好に関する一考察

目的：日本の高齢社会は進行真っ只中で、来るべき2020年には4人に1人が高齢者になると予測されている。高齢者が生き生きと生活していくためには、衣服もまた基本的な生活財として、重要なファクターである。衣服の色や形が心理的に大きな影響があることは、すでに報告されているところであり、逆に心理効果をねらって、老人ホームでもその利用も検討されているとも聞いている。一般に日本の高齢者は地味で控えめでくすんだ暗い色の服装というイメージがあるが、実態はどうなのか。その理由はどこからきているのかなど、高齢者の服装の実態と意識を探り、今後のシニア相談、助言に活用したい。

方法：①街頭において高齢者の服装の色の観察調査を行った。

②東京都、千葉市、横浜市に居住している高齢者に面会し、10色のカラーカードと5色のカーデイガンを実際に示して、色の嗜好と理由、着た時の気分について、予め用意した質問表に従って聞き取り調査をし、その原因を探ることを試みた。

結果：①街頭での観察結果では、予測どおり、高齢者の衣服は無彩色が多かった。

②調査対象の高齢者の平均年齢は74.3歳であったが、視力は衰えているものの、健康で、多少お化粧もしおしゃれ心もあり、衣服は自分で選び購入している者が殆どであった。カーデイガンの色選びでは、好みとしては明かるいピンクなどあげているものの、実際には明るい色を選んだ高齢者は少なく、年齢にふさわしい、上品に見える、気分が落ち着く等があげられ、他人の目や社会的規範が影響していると思われた。また同居家族がいるかどうか、化粧等のおしゃれ心があるかどうかも色選びに無関係ではないことがわかった。